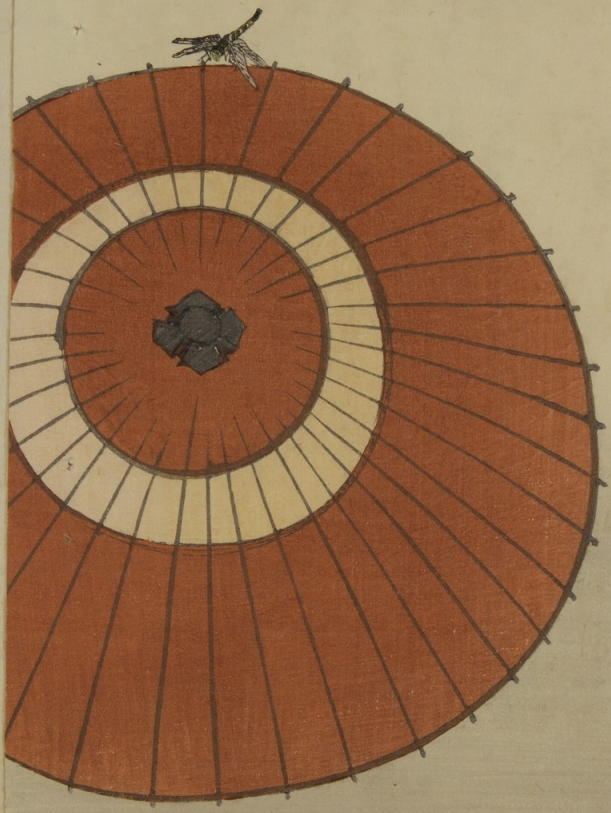

叙

天下重宝の白紙へあれ〻墨を塗りて見て下されとハ生あ
る者のゑはれ〻[illegible]苦の義理でハ[illegible]ふり其れをのめと
[illegible]てのけるを今日の小説家と申すとこゝや香具師の謂ふ
因果とハたの事三ヶ先の烏が啼いてハ大方これを笑ふ
とのでがふあるべー

されど熟く思へバ小説家と申すハ極めて鼎の沸い者ゆり朔する
所唯一言妙でよとゑはれこゝ在りゑはれずバみづかふ云つて
あんずる程の仕合せ[illegible]えを庄附けんを三之目の奴が首
を尽るよりも易ー つまりぶたこなの垂の蛞蝓の子ほどゝとて
むほんゞ出るでもふくけふゝとて いつ一つ握るでもふー徒無

用でよの五字に代ふること妙でよの三字を以てせらるればそれでいづれも大々満足[illegible]仏得る所疑ひ無し

ふびんや緑雨も其端くれ[illegible]のこび「かくれんぼ」とふを書きめ[illegible]昔て己が初考の説心得る説たる如く色摺の表紙を附て出版するまちがれば出色との評あるハ昔男人早く亦知より能々注意よ乃ばず鳥同ごけ城まちかひふく春陽堂主に取ふせ玉はり其侯「まるめ」て古葛籠の借ひ張頃るこ通常とかぼの方一「かくれんぼ」ハほ[illegible]こうどやと驚ぬる言葉まぐれ者もあらバ其時アイサ妙でよと御世遣かるれバ涙むべし見れば小説を読且評する一大秘密の復法あり[illegible]涙一玉ふとある可しず

廿四年五月

正直正太夫 謹識

化石説

野雨醒客 著

[illegible]

[illegible]

用ゐるの由をよこせ[illegible]少でよのまゝをよこせ[illegible]

いづれも[illegible]

ちやくや紙面の[illegible]「かくれんぼ」とふ[illegible]

[illegible]者てるや初者ふ[illegible]

出版するまふ[illegible]

[illegible]

其俣[illegible]

一「かくれんぼ」[illegible]

其時アイヤ妙[illegible]

且[illegible]

十四年五月

正直正太人謹識

かくれんぼ

緑雨醒客著

秀吉金冠を戴きたりと雖も五右衛門四天を着けたりと雖も猿か友市生まる時を同じ乳呑兒ふり大同たりと大盗さると聾が聞くも音は異なるまじきも變ずる塵の世の哀ひらるるが栄枯窮達一度の末代とて阿房陀羅経も亦之まを説くりお噺も山村俊雄と申をふところ育ち團十菊五を島原より見よ帰り途飯だけの突合と兎在る二階へ連込よれさぞるるるの端緒一向ざね一ツ献ずやうとるるれるる猪口をイエ何うも私そと一言を三言よ分々て迷惑ゆゑの辞退を、酒席の憲法恥をかいず可らずと強られて漸と受る手頭の譯もふく顫へ半ば吸物椀の上へ篠を束ねて降る驟雨酌とる女ぶオヤ失禮と軽く出う山俊雄そ只を

〳〵と著を取らずお銚子の代り目と出て行く後影を見澄し洗濯をこの間と怪げなる薄鼠色の栗のきんとんを一つ頬張つたるゝが関の山、梯子段を登り来る足音の早いに驚いて周章て嚥下し物平を得ざれば胃の腑の必ず鳴るを堪らへるも可笑〳〵同伴の男も既十二分に呑りて元うが不等邊三角形の眼をたるませ何うぞ山村の好男子美しい呼を御覧に供しやうかねと撃て放せと向けいる筒口俊雄をこの頃喫覚えと煙草の煙に紛らかし莞爾と受たも返辞ふけまを注復端書も駄目のことと同伴の男ともじかしぐ偖この土地の奇麗のと云へば、ある〳〵島田よハ間ぐあまど小春を左物分添ハ大吉婆呼よ遣はと命ぜらを未来ぬ先この〳〵俊雄て卒業證書授與式以来れ朐躍らせ若しと伽羅の香の間こう〳〵扇を擧げて麾かるともあらば返を

る駒ふき我まて何と答へんかと豫審廷へ出る心構へ態と燭臺を遠退けて顔を見らまぬぞ一の手と逆茂木製造の程もなくさらくと衣の音ゝそれ来さと俊雄ハ復と顫へて天ふも地うも頼とすると後ふる床柱これへ凭まて腕組をるを海山越てこの土地ばのりへも二度の引眉毛又ゝと云る大吉の目ふ入りおふさぎで御座りするのと矢庭ふ打こまれて俊雄ハ縮上り誠恐誠惶詞ふきを同伴の男が助け上げ今日觀た芝居咄を座興とするふ俊雄も少々の應答へが出来夜深くふゝぬ間と心ひづつけども同伴の男ゞ容易よ立つ氣色ふゞまぞ大吉が三十年来こまを高標と磨いるる額の疵の如く輝るを氣ふしふぐゝ栄ぬもの弓浮世の義理と辛防しさるこの我前よ餘念なき小春ゞ歳十六許色ぽッてりと白き丸顔の愛敬溢るゝを何の氣もふく瞻め居

たゞふ又もや大吉よ認けらるとお前よハ貴郎のやうふ方がいゝのゞよと彼を抑へ此を揚くる畫策縱横大英雄も善智識も煎じ詰めれば女あつての后ふう之を聞いてアラ姉さんとお定りのやうふ打消す小春ふうも俊雄ハぽッと顔赤め男らしくるき薄紅葉と斯様の場合ふ小説家ゞ紅葉の恩澤よ浴せるそれ幾千、着たゞ糸織の襟を内々直したゞ初心さ小春俊雄ハ語呂ゞ悪い蜆川れ御尼介ふハふくぬとゞと同伴の男ゞ頓着ふく混返す程猶逡巡みゝさうゞ孰ゞ知らん異日の治兵衛とこの俊雄今宵ゞ色酒の浸初め鳳雛麟児ハ母の胎内を出でゝ日の假り名よとゞめてあるれ評判の秀才もられうゞ無茶とうゝる

試みふ馬から落て汝馬ゝさの口調よ倣ゞ二つ寐て二ツ起ゞ二日の後俊雄と割前の金届けんと同伴の方へ出向くるふ是ハ

頂うぬそれでと困ると世間のミエの推つ遣つの揚句然らば今一夕と呑むの願ひの同伴の男ハ七つのものを八つ迄ハ難へうちつも五斗兵衛の未亂醉へで三郎づもの鉄砲の音位ハよハびくりともせぬ強者其お相伴の御免蒙りたいハ万々ふもど何らで御近日と有觸たる送り詞を、契約ふ片務あり果さゞるを得ずと思出したる後雄を早や友仙の袖や袂の眼前ふ隠顕き賛否何まともに決し難たる眞向から満更小春の憎いでもあるまいと遠慮ふく發議者ふ斬込まれそれ知らまてて行くも憂し行ぬも憂しと肚裡で一上一下虚々實々發矢の二三十も列べて闘ひされど其間ふ足で記臆ある二階へ登り花明かふ鳥何とやら書く額の下へ遂ふ落着くとそれバ六十四條の解釈も略定まり同伴の男の隣座敷へ出て居る小春を幸ひふり貫つて呉まとの命

令畏まると立つ女と入まてのそりて今日て黒出の着服ゑ一層器量優りのすゑ小春お貴郎能くと太半分て消て行く片靄俊雄さぞつと可愛氣立ちてそれから二度三度と馴染めば馴染む程小春ぞもつかゝ〳〵魂ひ何日とふく叛旗を飜へ〳〵顧眄ゑ限りあれも小春これも小春兄さまと呼ぶ妹の声迫お貴郎やとすゝ〳〵甘たれゝゑ小春の聲と疑てれ今ハ同伴の男をこちらからおいで〳〵と新田足利勸請文を向ける程ゑ二ツ切の紙三つゑ折ることも能く合点〳〵頓て本文通りゑまゝ同伴あゝを邪魔と思ふ頃ハ紛まもふい下心、入らざゑ所へ勇氣お出て敵て川添の裏二階最う掌裡と單騎馳向ひたゑお侍行義よくてハ成難いぶこの邉の戀の辻占淡路島通ふ千鳥の幾夜とふく音づゝゑ貴郎のお手ハ！逆寄せの當坐の謎俊雄ハ至極御同意ふれど經驗おけまで

まぐ〳〵心怯まて寶の山へ入るぐ〳〵其手を空〳〵密と引退け醉ふでもる〳〵眠るでもる〳〵唯忘やらぬらぬと更る知らぬ夜々の長坐敷つゐ出そびまて帰りしぐ山村の若旦那と云へど温和しい方よと小春ぐ顔よ花散る容子を御參るまつやと大吉ぐ例の額よ睨んで疾から吹込ませたる淺草市羽子板ねぐ〳〵せしを胸三寸れ道具よ數へ、戻り路て角の歌川へ軾を着けさせ俊雄ぐ受とる酒盃を小春よ注ぐせてお睦じいと曖より易い世辞この手とこの手し斯う合せて相生の松ソレと突遣たる出雲殿の代理心得、間、髪を容れぐ〳〵働きよ俊雄君閣下初めて天よ昇るを得て小春ぐ其歳暮裾曳く弘め、用度をこ〳〵に仰ぎたてまつまで上下ふ〳〵ぬ大吉が二挺三味線つまて其節優遇の意を昭らかよせらまこ〳〵

おちゆんと傳兵衛おさんハ茂兵衛小春と俊雄と相場が極まで
望の如く浮名と廣まり逢ふだけの命の四疊半の差向ひの置炬
燵トント逆上まとると時と共て甚頃と嬉しく偶まかけちがへ
バ互ひの名を右や左や反へ曲書一里を千里と帰つてあくる夜
千里を一里と復さ出て来て顔合せれでそれで氣が濟む雛さ
事罪のない遊びと歌川の内儀からの評判したりしが或夜會話
の缺乏のう容赦のない欠伸防ぎるお前と一番の仲よしいと俊
雄の出しし即題を儂より歳一つ上のお夏呼んで遣つてと小春
の口から説勸めし答案の後日の祟り今し方明いて参りまし
と着更の儘ある華美姿名ハ實の賓のお夏が凉い眼元み俊雄も
ちくと氣を留しも小春ある手前格別の意味もなのりしも不圖
其後俊雄の耳へ小春ハ野々宮大盡最愛の持物と聞えしより扨

てハ小春も尾のある狐欺されたくと疑ぐるよりそ是迄覚えぬふい口舌法を實施し今あらためてお夏ぞ好たくく土地を離れて意風の福ゑ〜からお名ざ〜ゑれバと口をかけさせオヤと言せる座敷の敷も三日と續けぞ夏ハサルもの捨てる客でもあるまいと湯漬かつくむるも早い札附男ひとりぞ女の道で御座りまするか、勿論、それで儂も決まし、決たとて誰を、誰でもない山村の若且那俊雄さまと豈夫も斯うでもなのからうゑれど機を見て投ぎる高ひ上手俊雄も番頭丈ハぞ昔語り頭筋元からぢわと眞よ受けお前よハ大事の色ゲし云へぞ御座りまするとも御座りまもとも是許りでも青と黄と褐と淡紅色と襦袢の袖を突附らまおのぎぞと俊雄ぞ思切つて引寄んとするをお夏ハ飛退其手ハ頂きまするせぬ貴郎よて小春まんぞと起した

り倒したる甘酒進上の第一義俊雄をぎりぎり決着ありつけの執心をかきむしらま、何の小春ぞ、必ずと畳かけてぬしのうそもどへ口移しの酒ぞ媒妁それふりけりの寐乱れ髪を口善悪なおいぞ習ひの土地それで小春とお染の母を學んで風呂のあがり場から早くも聞傳へ緊急動議貴郎いやと千古不變万世不朽け朋づくし鐘よござる數々の怨を特る前髪よ命ドて俊雄の両の膝へ敲きつけお前と野々宮のと勝手馴まぬ俊雄の狼狽へるを、知らぬく知ませぬ憂い嬉いも貴郎と限る儂の心を摩利支天様聖天様不動様妙見様日珠様も御存ドの今とあつて暗々男を取らまていい何う面目が立つの立ぬの性悪者めと罵らま、思へどこの味ひの戀の誠と俊雄い精一杯小春をあざめ唐琴屋二代み嫡孫色男の免許状をみづく拝麦暫くれ夏への足をぬき

しが波心樓の大一坐よ小春お夏ぞ婦多川の昔を今み、何うやら
話せる幕ぞあつたと聞きたもるぬと又福うへまぐれ迂
みお夏を呼べでお夏ハお夏名譽賞牌を孰らへとも落かねる
を小春ぞ見るそうら又かと泣て縣るよ最うふつつりと浮氣ハせ
ぬと砂糖八分の申開厭氣としゐも実ハ未練窓の戸閉けて今鳴
るそ一時かと仰ぎ視まぞお月さはつでも空ぼけてまんきうあり
脆いと申せで女程脆いそ御座らぬ女を説くハ智力金力權力腕
力この四つを除けて他よ求むべき道そ御座らねど權力腕力ハ
拙い極度、成るぞ早いそ金力と申す条先づ積つても御覧ドろ
我ま金を以て自由を買へバ彼亦金を以て自由を買たいハ理の
當然されで男傾城と申をも御座るなり見渡す所智力の世界畢
竟ぞまかくハ其れの增長くらるれで上手ふも下手ふも出所

てあるべくおもお遊ぶのごと思ふいまぶく金を愛しむ土臭
料見あれを遊ばせて遣るのごと心得まバ好まぬ迄も嫌れる
筈ハ御座らぬ是即ち女受け秘訣色師たる者の具備せべき必要
條件法制局の裁決を徴して明かで御座るも何處で聞いたか氏
も分らぬ色道じまんを俊雄ハ心底歎服し満腹し小春お夏を両
手の花と繪入新聞の標題を極込んざれど実以て彼の古大通の
説くの如くんバ女ハ端からころりく日の下開山の栄誉を辱
うせんと死者の首を斬るよりも易しと鯉、鵬とする大頑發起
痴話熱燗より骨も肉も爛まるく俊雄ハ相手待つ間歌川の二階か
ら不圖瞰下るく隣の桟橋より歳十八許の細そりとさるの矢飛
白の袖夕風に吹靡かすを認めあるそと問へば今ぞ若手の貴出
し秋子とあるを然り氣るく肚みたるみ直ぐ其翌晩月の出際

よ隅の武蔵野から名と因縁づくの秋子をまねけで小春とよ
お夏もよく秋子と同じくらゐの何い兎もあれおちこのづき
と氣取て見せく盃ごの毒の器なんとハ不可ぬ俊雄なまこと好いお
色やと云るくを取附の浮女噺初の座敷をお互ひの寸尺知まね
ば要害嚴くく、得て氣の屈るもちと俊雄を切上て帰りくがそ
わるく後を武蔵野へ入浸り深草ぬくこのかくこの意のお百度秋
子くくと引附け引寄せるくらるくばと遠くお臺所より伺へど
御用を無いとてげるく振放くいかされぬもくく其角曰くまがれ
るを曲てまがらぬ柳よ受るも漸古るれど何うも言れぬ取廻く
よ俊雄い成佛延引くくゝ父が奥殿深く秘置いたる虎の子をぼつり
くく背負て出て皆らの真葛原下這ありくのら猫の児へ割歩を
打ち大方出来くくい噂の土地よ立つくを小春お夏ご早々と

間込み不斷い若女形で行く不破名古屋も這般の事たる國家問題よ属すと異議ふく聯合策ご行くれ党派の色分を云へぞ小春い赤お夏い萌黄の天鵞絨を鼻緒ふくたる下駄の音荒々しく俊雄秋子が妻も籠まう我まも籠まう武藏野へ一度まどつと示威運動の呐声座敷ゞ座敷だけ秋子も先刻逃水『らいよ、おぶ、やまむらとくを』へ特筆大書ものべき始末とるくふ俊雄も聊の辟易したるの弱きを扶けて強きを挫くと江戸で逢たる長兵衛殿を應用くれいおまぐと小春お夏を跳飛ぐ泣るあら泣けと惡っぷく出とのゞ直打とるうそれ迄拝見それバ女冥加と手の内見えこの格を以て六箇敷い所へ理をつけらも実い敵を木戸近くる入き散々ぢらくぬいく上の俄の首尾千破屋を學んゞ秋子の流眄ふ俊雄も頗る勢ひを得、宇宙廣くと雖も間違つるのふ

いものを我意と天氣豫報の「所」より依り雨悦氣面に満て四百五百
と入揚げ〳〵トゞの詰りを秋子は見届け然らば御免と山水と申
す長者の許へ一應の照會もなく引取られ〳〵より俊雄は尾斯を
離れて風船乘天を仰いで吹かける冷酒五臓六腑へ浸渡りたり
それ情らいろは四十七文字を按ずるに、こちらの登詰めらるゝ
まけの「ま」が脱けまを殘る處の「やけ」とあるは自然の理なり俊
雄を秋子は砂浴せらまくらる一旦の拍子ぬけ其砂肚に入て忽ち
やけの炭と化し前年より父が預る株式會社に通い給金なり餘
祿なり仲々の収入あり〳〵も悉くこの邊りの溝へ放棄り經綸と
申すが多寡が糸屑いづまき天下は綱渡りの事まる〳〵遊んで所
が杖突りて百年と畫も夜もアヂを遣り甘い辛いが漸々分れ
でなのづうら灰汁もぬけ戀い側次第と目端が利き、軽い間み

締りを附けて男振も一段あがりて村様〳〵と楽ふ座敷をいと
しがられ〳〵八幡鐘を現今のやうに合乗膝枕を色よしとする
通町邊の若旦那に真似のならぬ寛濶と極随俊雄へ打込んだる
歳二つ上の冬吉ふり凡〳〵らの憑と云ふ親密に過て一寧調
らぬ例なれど舟を橋際に着け〳〵梅見帰りひるんふ〳〵の俊
雄冬吉ハ離もられぬ縁の糸巻来るハ呼ぶハの逢瀬繁く姉じや
弟じやの戯ぶれに、異なものと土地に名を唄はれ我もうう男
ハ年下なれバ色に儘に成るに冬吉ハ面白く今夜ハ儂に奢り
ますすると銭金を帳面のうらの隠遊び、出ぬ道明中点厚かハ
知らねど類の無いのを着て下されとの心中立らの冬吉に似と
冬吉が餘呼にも出来まいものでもなんと新道一面に氣を廻し
二日三日と音信の絶て無い折々て河岸の内儀へお頼みで御座

りますと月始めよ魚一尾おろれとあく報酬の花鳥使ひ〳〵の韻を踏んで屹度〳〵の呼出状今方貸小袖を温習かけよ奥の小座敷へ俊雄を引入れまゝ笑さざうれ耳元へ旦那のお来臨とせ銭銀貸よ忠義を賣るれ何どんの注進ちえッと舌打〳〵あづら明日と詞約へて裏口から逃〳〵遣なる跡の氣のもめ方若〳〵や以前の歌川へ火ぞ附ハをまいうと心配ありげよ撲つ〳〵吸殻、落かけて落ぬを何の呪ひう周章て〳〵煙草を丸め込み其火で再と吸附て長く吹くを傍らよ在〳〵ます弗函の代表者顔へ紙幣貼さ旦那殿ハうれを癪氣と見て紙よ包んで帰り際よ残〳〵置まゝ延の結晶難有くもないと直から取て俊雄の歓迎費俊雄ハ十分あまへ込んで言ふ也次第の倶浮まを四十八の所分も授り融通の及ぶ限り借て〳〵皆持寄り其頃から母ゞ涙のいぢら〳〵を尚暁よ

間のあつ俊雄て煩さいと家を駈出し當分冬吉の許へ御免候へ會社へも欠勤勝ちふう繪よかける女を見て徒らに心を動かすが如くといふ遍昭が歌に生き變り肱を落書に墨の痕淋漓たる十露盤に突いて湯錢を貸本よかすり春水翁を地下に瞋せしむるの傳ハ二言目に女で食ふといへど女で食ふハ禽語樓の所謂實母散と清婦湯他ハ一度女に食まれて後の事ふり俊雄ハ冬吉の家へ轉げ込み白昼其處に大手を振ていりくとなる朝湯に起るのら直ぐの味を占め紳士と云ふ文の名もあるべき者が三筋に宝結びの荒き堅縞の温袍を纏い幅員僅二万四千七百九十四方里の孤島に生まれて論ぶ合ぬの議ぶ合ぬのと江戸の伯母御を京で尋ねくでもあるまいものゝ、あはぬ詮索に日を消もふう極樂ハ瞼の合ふく一

時と其能とする所ハ呑むなり酔ふなり眠るなり自隨落ハ馴れるよ早く何日迄も血氣熾んと我れ〳〵信用を剥で除けこまの皮何うあるるもものと沈着居たるぞさて朝夕を共ふすると云まで各〳〵の心易立こそ襤褸が現れ俊雄と漸く冬吉のくどいよ飽いて抱の小露ぞ曙深を出の座敷よ着る雛鶯慾の無い所を聞たく〳〵と待くらしぞ深間ありとのとより離またる旦那を前年度の穴填め暫く袂を返させんと冬吉ぞ其客筋へもらまり天か命この家を俊雄よ預けて熱海へ出向いたる留守を幸ひの優曇華、機乗ずべく〳〵と密と小露へエヂソン氏の勞を煩はせバ姉さんよ呵られまそるハ初手の口青皇令を司どれバ厭でも開く鉢の梅殺生禁断の制札ぞ却て漁者の惑ひを募らせ曳く網の度重まで阿漕浦よ眞珠を獲て言ふなれ前言ふまい貴郎の安全器を据附

げ發火の豫防も施しありしゐ疵もち足を冬吉ゞ帰りて后一層目ゐ立ち小露が先月からのお約束と出さ跡尾花屋から懸りしを冬吉ハ斷り發音ハモシの二字を以て俊雄ゐ向い白状まされと不意の糺彈俊雄ハぎよっとしたれど横へそらせて斯ゐ上ハ是非も無し白状致します私母ハ正しく女と態と手を突て云ふを、えゝ甚口ゞと疊叩いて小露を何うゐさゐとそもゆ儂が馴そめの始終を冒頭ゐ置いての責道具ハテ譯もそゐ濡衣梳の白魚をむしゝつて食ふそれゞゝ鰈ゝゝゝも骨湯ハ頂かぬと注時権現様得意の逃支度冗談でを御座りませぬと其夜冬吉ゲ金輪奈落の底盡ぬ腹立ち只今と小露が座敷戻りの挨拶も長板橋の張飛睨んどぞのりぬ勢いゐ小露を顫へ上りそれから明けても三國割據ゐ互いゐ氣まゞゝ笑声をお隣のおぞくんまも下し賜らず

長火鉢の前の噛楊子一寸聞けバ惡くゝいらゝけまど氣ごつい
て見まゝ見らまぬ紅皆白粉の花の裏路今迄さのみでもゝく思
ひ〻冬吉の眉毛の蝕ひゞ弥々別まの催促客とゝるとも色とゝ
ゝゝとハ今の誠め我讐敵ゝもさせまゞきハこの事と俊雄漸く
夢覺て父へ詫入り元の我家へ立帰れゞ喜びこゝすれ氣振りゝ
もうらまぬ母の慈愛厚く門際ゝ寐て居ゝまゞき犬迄が尾を掉
ゝゝ俊雄ゝ只管疇昔を悔て出入りゝ世話をやうせぬ神妙さハ
遊ゞぬ前日ゝ三倍〻雨晨月夕流石思出すとのあり〻かど末の
さめゝ目をつゞりて折節襦の上で聞くさわぎ唄も易水寒〻と
通りぬけゝゝ冬吉ハ口惜〻がり〻が彼の歌澤ゝ申さらく蟬と
蛍を秤ゝかけて鳴て別りゝこの焦まて退きゝゝの噫我ま之を奈何
せん昔おもゝゞ見ゞ知らずと是まゝ亦寐心わゝ〻諦めていつぞ

や聞流〳〵誰やらの異見を其の時初めて肝のそこ〳〵探り出しぬ
覩どれど松の嵐も續いて吹かず息を入まてからが凄〳〵いも
のなり俊雄も二月三月ハ殊勝ふ消光〳〵の今ぞ遊び〳〵い盛り
山村君何うぞねと下地を見込んで誘ふ水あれバ、御意ハ〳〵注
んとそ思ふ俊雄ハ馬ふ鞭御同道仕つると臨時總會の下相談か
ら又〳〵狂ひ出し名を変へ風俗を変て元の土地へ入込み黒七子
の長羽織ふ如真形の銀煙管寧惡党を賣物と毛遂が嚢の錐どち
と突込んでこふ〳〵廻ると我から惡党と名告ふ惡党もあるまん
と俊雄が何處ぅ保ふ残ぅ温和振りへ目をつけて迂架と口車へ
腰を懸けとて解易い雪江とつふ廿一二の肌白村様と聞かで遠慮
もなくきふ今迄こうけちでふて逢ざりゝれバ俊雄を其まとい思寄らず
一も二も明し合ふ〳〵る姉分のお霜へタッタ一日あの方と遊んで

見る智慧ごあらば貸て下されと頼み入りしこのお霜ハ承知と呑込
んで俊雄の耳へあのね尽くしの電話の呼鈴聞えませぬのと被せこ
けるを落魄まって白い物を顔へも塗ませぬとポンと突退け二の
矢を繼んとするお霜を尻目ふ懸て俊雄ハ其處を立出で供待ふ久
伸うるに亦節奏ありと研究中の金太を先へ帰らせ初のきハ顔を知
らまぬ搞手前の菊菱お生憎で御座りますとしふ雪江を二時が三時
でもと待受けアラと驚くと縁の附際こちらからはやうく憑せくと首尾
電光石火早い所を雪江がお霜よ誇まるでお霜ハそんくと口を明てあ
すと曲亭流を以てせば半晌許兎角大事そうな顔そうれど潰さんとう
らみを言くく言まくらうと俊雄の跡をつけわらひ、そんでる貴郎ハ濟
まぬすかい、濟ぬくく真実濟まぬ、屹度濟ませぬの、屹度濟ませぬ、其濟
ぬハ誰へで御座りますす、先祖の助六さまへ、何で御座んすと振

上てゝぶつ真似のお霜の手を俊雄ハ執らへ是でハ猶濟むまいと意ハ追々下へ落て遂ふふゝりが水と魚との交を隔て脈ある間ハ執らうゝも血を吐せて雪江が見て下されと紐鎖へ打させ山村の定紋負てハ居ぬとお霜ぶ梯へ蒔繪しゝ日を最う千秋楽と俊雄ハ幕を切り元木の冬吉へ再び燒附いゝ腐ま縁燃盛ゑ噂ゑ雪江お霜て顔見合せ鴛鴦珍の烟草入を奥歯で噛んで畳の上敷へ投りつけ扨てハ村様この目が足りさんぶと其あゝゑ日の髪結ふふぶ當り散らし欺されて啼く月夜烏まゑのけぬとと觸廻りゝより村様の村ハむら氣のむら、三十前ゝら綱でハ行りぬ恐しの腕と戾橋の狂言以来うげり仇名を小百合と呼ばれあれと云へど點頭りぬ者のふゝ名代の色惡変うと云ふハ妾ゝう心不目出度ゝゝ

かゝまつん淫 終

5.10.13 2

明治廿四年六月廿五日印刷
仝　年七月　五日出版

版權所有

文學世界六卷與附

著作者　齊藤緣雨
發行者　東京日本橋區通四丁目五番地　和田篤太郎
印刷者　仝　京橋區采女町三十一番地　酒井留吉
發行所　東京日本橋區通四丁目五番地　春陽堂

每月二回發行一冊讀切實價八錢十冊前金七十五錢郵稅二錢宛郵券代用一割增

末廣重恭著 政治小說

南洋の大波瀾 全

一冊讀切三百廿四頁有實價四十八錢郵稅六錢

○文學世界目次

半紙木板摺彩色表紙頗美本一冊讀切實價八錢郵稅二錢十冊前金七十五錢

第一 紅葉山人作 命の安賣
第二 山田美妙齋作 猿面冠者
第三 二十三楷堂作 かくし妻
第四 山谷巖人作 かたゝ糸
第五 忍月居士作 辻占賣
第六 正直正太夫作 かくれんぼ
第七 廣津柳浪子作 いとし兒
第八 幸田露伴子作 息子心（献討鉄瓶の甕）
第九 抱一庵主人作 黑頭巾
第十 山田美妙齋作 韻文夢の天女

○聚芳十種目次

本誌は諸大家の傑作小說各一冊讀切金十三錢郵稅四錢十冊前金一圓廿錢

一卷 香雪散人著 花の種
二卷 紅葉山人著 新色懺悔
三卷 山田美妙齋著 やたらじま
四卷 南翠外史著 臥待月
五卷 抱一庵主人著 闇中政治家
六卷 廣津柳浪子著 糸のみだれ
七卷 三味道人伴子著 戀の重荷
八卷 幸堂七變化著 さゝきげん
九卷 梅花道人著 とゝまじり
十卷 饗庭村雪著 達摩

○新作十二番目次

半紙木板摺彩色表紙口畫入美本一冊讀切各實價三十五錢宛

一番 饗庭村雪著 勝鬨
二番 紅葉山人著 此ぬし
三番 山田美妙齋著 教師三昧
四番 三味道人著 桂姫
五番 南翠主人著 新二錄倉武士
六番 學海居士著 十津川
七番 香雪散人著 梅うの
八番 幸堂得知著 蓬萊噺

大通世界

字入小說叢表紙縮摸半紙木版摺年月發行各一冊十錢郵稅二錢

美術世界

本實は木版彩色摺書摺美麗なる雜誌なり各一冊拾錢郵稅二錢